

# 英語教育実践としてのヴィゴツキー(1)：思考の問題

西本 有逸

(英文学科)

## Vygotsky as a Praxis in English Language Education (1): With Special Reference to Thinking

Yuichi NISHIMOTO

2018年11月30日受理

**抄録**：本稿は、英語科教育における思考の問題・思考力の育成について、ヴィゴツキーの思考論を参照しながら、記号操作としての思考・世界とつながる思考・内的プログラミングの重要性について考察する。次に、附属学校における優れた英語教育実践の紹介から〈思考・判断・表現 → 意味生成〉という図式を示唆しておく。

**キーワード**：ヴィゴツキー・思考・英語教育実践

## I. はじめに

文部科学省は初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた「英語教育改革実施計画」を平成25年12月13日に公表した。続いて、平成26年9月26日英語教育の在り方に関する有識者会議が「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」を行った。この報告の中の1「英語教育改革の背景には以下の記述がある。「これからは、国民一人一人にとって、異文化理解や異文化コミュニケーションはますます重要になる。その際に、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠であり、アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきである。今後の英語教育改革において、その基礎的・基本的な知識・技能とそれらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することは、児童生徒の将来的な可能性の広がりのために欠かせない。もちろん、社会のグローバル化の進展への対応は、英語さえ習得すればよいということではない。我が国の歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とのコミュニケーションができればならない。」（下線部は筆者による）

このように、他の教科と同様に英語科においても思考力・判断力・表現力の育成は焦眉の急である。本稿では特に思考力を取り上げ、ヴィゴツキーの思考についての考え方を参照しながら、附属学校の英語教育実践を紹介する。

## II. 思考についての基礎的考察—記号操作としての思考

思考とは「本質的には記号を操作する働き」である（ウイトゲンシュタイン 1975: 30）。ウイトゲンシュタインは警告する。「思考を「心の働き」として語るのは誤解を招きやすい」と（ウイトゲンシュタイン 1975: 30）。思考には記号が介在しており（より正確な表現は、思考は記号を「媒介」としている）、この記号の操作こそが要諦なのである。そして、記号操作を人間は習得し、すなわち意識内に記号を内面化することにより、人間の認識能力や精神発達が生理的自然的な低次の思考段階から人間文化の社会的歴史的発達原理に沿って高次の発達路線を辿るようになる」と説いたのがヴィゴツキー（1896-1934）である。ヴィゴツキーによれば、思考とは注意・

知覚・記憶・想像・情動・意志等と並んで人間の高次精神（心理）機能の一つであり、その過程（思考過程）は記号によって「媒介」されている（ヴィゴツキーは媒介という概念をマルクスの労働手段とヘーゲルの理性による媒介的活動から学んでいる）。さらに、その発生は二つの平面で経過する。すなわち、始めは社会的平面で主体と主体との精神間のカテゴリとして発生し、次に個人の心理的平面で精神内のカテゴリとして内面化されるのである。このように、思考という人間の高次精神機能は記号によって媒介されており、社会的な起源から個人内に取り込まれ発達していくというのがヴィゴツキーの文化歴史的理論の基本テーゼである（西本 2002）。

次に、上述の記号の最たるものは何であろうか。それは言語にほかならない。言語と思考との関係を教授・学習と発達の見点から鋭く、かつ深く論じた労作はヴィゴツキーの『思考と言語』（1934年）であろう。世界でも逸早く1962年に完訳を成し遂げた柴田義松（1930-2018）は以下のように解説している。

「人間は、道具を介して環境にたち向かう。環境に対するこのような間接的関係こそが、人間の実際の活動と同時にその心理活動を動物の活動より区別する基本的な点である。（中略）「精神的生産の道具」となるものは、言語である。物質的生産そのものではなく、それを基礎に発生する人間相互の関係の特殊な形式、すなわち言語と社会の文化こそが、人間の心理活動を媒介するとともに、その心理を形成するのである。人間は、周囲の人々との言語的コミュニケーションの過程で社会の文化遺産を習得する。その結果、人間の心理過程の自然的メカニズムは根本的に改造され、本質的に社会的な人間意識が形成される。」

（柴田 2001: 446 下線部は筆者による）

さらに、ヴィゴツキーは言語と思考の関係を次のように定式化する（ヴィゴツキー 2001: 129）。

1. 思考およびことばの個体発生においても、われわれはこれらの過程に別々の根源を見出す。
2. 思考の発達に「前言語的段階」があるのと同じように、子どものことばの発達にも明確に「前知能的段階」を確かめることができる。
3. 一定の時期までは、思考とことばは、相互に独立した異なる発達路線に沿って進む。
4. 一定の時点で二つの路線は交叉し、それ以後は思考は言語的となり、ことばは知能的となる。

ヴィゴツキーの功績のひとつとして、心理学に歴史主義（より正確には弁証法的史的唯物論）を取り入れたことが挙げられるが、具体的には個体発生（ontogeny）に系統発生（phylogeny）が内包されていることがその内実である。言語と思考の発生的始源は異なるが、それぞれの発達路線が交叉するところに言語的思考（verbal thinking）が生まれる。いわゆる＜外言→自己中心のことば→内言＞という過程を経て言語的思考が成立するのである。6～7歳の子どもは複雑な思考を内言を用いて行うようになる。まさに、「思想は言葉で表現されるのではなく、言葉のなかで遂行される」のである（ヴィゴツキー 2001: 366）。

### Ⅲ. 思考についての運動的考察—世界とつながり、意味生成のために

思考の本質は記号操作であり、言語教育は言語的思考から始まるとしても、思考力の育成は操作としての言語的思考にとどまるものではない。思考そのものが、もっとダイナミックに運動するからである。土井捷三氏は難解とされる『思考と言語』の入門書を上梓したが（土井 2016）、その付録のなかで「なぜ、ヴィゴツキーなのか」と題して四点を指摘している。その筆頭が思考と言語の関係についての以下の記述である。<sup>注1</sup>

「ヴィゴツキーの主要なテーマである異種の機能の関連、特に、思考と言語の関係である。思考を操作とみる見方はピアジェをはじめ、ルビンシュテインなどがとる捉え方であるが、そうすると思考は内的な過程にどんどんはまり込んでしまい、外部とは離れていく。（中略）ヴィゴツキーはことばと結びついているので、思考は必然的に外界と結びつく。外界と結びつかない思考は成長がないが、外界と結びついた思考は成長する。（中略）ヴ

ヴィゴツキーは思考とことばの単位として意義を取り出す。ことば以前は意味であるが、ことば以後は語義に変わっていく。語義は成長し続け、やがては概念に成長する。生活的概念が成長するが、学校教育が始まると科学的(理論的)概念がやってきて、語義は成長する。ヴィゴツキーのいう一般化の構造である。ことばと結びつく思考はこれ以降も外界の産物を取り込み成長し続けるのである。

(土井 2016: 298 下線部は筆者による)

このように、ヴィゴツキーの思考論の特徴はことばと結びついて成長する思考、外界・世界とつながる思考である。成長とは語義(meaning)の発達であり、豊かな語義は豊饒な概念の発達を生み出す(西本 2016)。また、ヴィゴツキーは思考をサブカテゴリーである記憶・理解・応用・分析・評価・創造等に下位分類してとらえようとしな。要素還元論に与さないのである。全体・統体として運動する思考を重視している。<sup>注2</sup>

上述の「ことばと結びついて成長する思考、外界・世界とつながる思考」は教育において極めて重要な問題を提起する。それは「人間の自由」である。<sup>注3</sup>現代ロシアの第一級のヴィゴツキー研究者であるエカテリーナ・ザヴェルシネヴァは次のように言う。

「世界についてのわれわれの考え方とその世界で行為をおこなう可能性との相互の結びつきの程度は、語の意味(語義)の発達レベルによって決定される：意識の発達の過程で現れる言語的意義(verbal meanings)が差異化され、複雑なシステムとなるがために世界の現象の多様性すべてを反映することが可能となるのだ。語彙においてそのように世界を反映させたり、あるいは疎外されたり、言語に投射したりすることで、われわれはこの世界において知的に、そして自由に振る舞うことができるのだ。言い換えれば、世界についての意味生成のレベルを高めれば高めるほど、われわれは自由を手に入れることができるのである。(中略)ヴィゴツキーによれば、何びとも真の概念の段階で言語的思考ができる人は自由である。」

(Zavershneva 2014: 76-81 下線部は筆者による)

この文脈での自由とは心理学的な意味で使われているが、「知的に」そして「世界についての意味生成のレベルを高めれば高めるほど」という表現は思考そのものについてである。運動としての思考は「世界についての意味生成」につながる、すなわち意味を生み出すことをおさえておきたい。

#### IV. 英語による言語的思考としての内的プログラミン

これまでに述べてきたことは、実は母語による言語的思考、母語にもとづく思考の場合である。それでは、英語科における言語的思考とは何であろうか。英語母語話者の思考を日本人英語学習者は習得しなければならないのであろうか。母語獲得に費やした膨大な時間に比べて、英語学習のそれはごく微量にしか過ぎないのに、英語的思考の習得など一体可能なのであろうか。この問いに対して、現在の学問水準は次のように答えてくれる。

「・・・外国語にかなり堪能で、それを武器にネイティブの人に負けないような優れた仕事をしているバイリンガルでさえ、母語のほうが外国語よりも優勢な場合には、「思考」の様々なところで、母語が外国語に影響を与えるといつてよい。従って、母語での認識と並行して、外国語のネイティブとまったく同じ認識体系を持つ、ということ、非常に考えにくいことである。・・・つまり、「バイリンガル」とはいつても、ほとんどの人たちは、二つの言語を同じレベルの習熟度で扱っているわけではなく、優勢なほうの言語が、二番目の言語を使用しているときでも、思考に影響を与えているといつてよいだろう。」

(今井 2010: 221-222 下線部は筆者による)

まさに、外国語が学習や習得により母語を乗り越えることは、現実問題としては考えにくいということである。ただ、今井むつみ氏は外国語に習熟することは「思考の変容」をもたらすという。思考の変容とは何か。

「外国語を勉強し、習熟すると、自分たちが当たり前だと思っていた世界の切り分けが、実は当たり前ではなく、まったく別の分け方もできるのだ、ということがわかってくる。この「気づき」は、それ自体が思考の変容と言ってよい。」

(今井 2010: 222-223)

人間は言語というプリズムを通して、世界を切り分け認識している。外国語の学習は思考の変容をもたらし、世界の相対的なとらえ方を可能にする。このことは英語学習の意義のひとつとして考えられよう。では、母語ではなく英語による純粋な思考が困難である以上、英語科における学習時の言語的思考の内実をどのように考えればよいのであろうか。筆者はこの問題を内的プログラミング (internal programming) としてとらえている (西本 2005: 32-34)。内的プログラミングとは何か。

「一般に、ことばの発話の仕組みは、(意図・観念・思考の生成) → (輪郭的言語形式の生成) → (音韻系列の生成) → (構音運動) → (話す) という流れをたどるが、前半部の (意図・観念・思考の生成) → (輪郭的言語形式の生成) の過程で (英語の) 文法は実は大切な役割を果たしている。(中略) 発話の流れは思考 (thinking) の段階から始まる。その内容は観念 (ideas)・経験 (experiences)・心的態度 (attitudes) のイメージの集合体であり、もやもやとぼんやりした状態である。次に、このイメージの集合体が言語形式の原型に変換される。話し手は統語規則 (syntactic rules)・意味論 (semantics) の知識・形態規則 (morphological rules) を総動員することにより、イメージの集合体を言語表現に組み立てていくのである。」(西本 2005: 32) この一連の過程のうち、言語形式の原型が形成される段階が内的プログラミングである。それは、「言語的な発話が産出される際の無意識的な下図」(坂野・天野 1993: 183) であり、たとえば同時通訳者の翻訳作業・二言語併用者の言語能力・外国語初級学習者の発話等がこの内的プログラミングによるものとされている (坂野 1985: 49)。

英語による言語的思考としての内的プログラミングには、語彙の選択・文法や構文の選択がまず第一に要請される。筆者はこの選択のことをアップテイク (uptake) と呼んでおり、インプット (input) → インテイク (intake) → 中間言語の発達 (interlanguage development) → アップテイク (uptake) → アウトプット (output) という流れのなかに位置づけている。<sup>注4</sup>何をテイクアップするのであろうか。それは英語の概念 (L2 concepts) にほかならない。

## V. 附属学校における思考力を育成する英語教育実践

筆者が附属学校教員の授業実践を指導するときに、思考力の育成について必ずお願いをしているエッセンスを記しながら、附属学校の英語教育実践を紹介する。

### 1. 小学校

#### (1) 現実／想像力と結びついた思考力の育成

小学校の段階では、英語による言語的思考は無理である。児童は概念的思考にもとづく記号操作ができないからである。しかし、英語の音声・リズム・定型表現・高学年では文字に慣れ親しみながら、世界のリアリティに結びついた思考力の育成は十分に可能である。

#### (2) 実践例1 (附属京都小中学校第4学年 ‘Jobs in the Future’)

- 未来になくなるであろう職業や AI (人工知能) を持ち合わせたロボットの活躍等を知り、未来において AI を持つロボットではなく人間にしてほしい職業について考え自分の思いを表現する。
- これまででは自分が好きなことや所有しているものなど自分に関する事項について主観的に発表してきたが、本単元では物事を 客観的にとらえ、自分なりに想像し、考え、表現する。
- 本実践は「AI ではなく、人間にしてほしい職業」「残ってほしい職業」について考えるという、想像力と

結びついた思考力を育成する実践である。まさに、想像は現実に戻るのである（ヴィゴツキー）。

### (3) 実践例 2 (附属桃山小学校第 5 学年 ‘What time do you get up?’)

- 一日の生活に関する表現や頻度を表す語 (always / usually / sometimes / never) を 自分の日課や家での役割に合わせて適切に選んで友達と伝え合う。
- 【日課】 get up / wash my face / wash my hands / brush my teeth / comb my hair / eat breakfast / go to school / do my homework / eat dinner / take a bath / watch TV / go to bed
- 【家での役割】 get the newspaper / wash the dishes / take out the garbage / set the table / clean my room / walk my dog / water the plants / clean a bathroom / make my bed / fold laundry
- 児童は豊富な表現の仕方を学びながら、自分の一日を振り返ることができる。とりわけ、頻度を表す副詞の使い方が思考を豊かにする (例 I sometimes wash the dishes. Sunday, Tuesday, Friday, and Saturday. How about you?)。

## 2. 中学校

### (1) 英語による言語的思考を鍛える

中学校段階では、既述の内的プログラミングが自動化されてできるようになるまで、練習 (practice) が必要となる。小学校と異なり文法シラバスになっているので、新出文法の形式と意味のマッチングを学び、文法を形式において正確に (accurately)、その意味を十分に (meaningfully)、しかも適切な場面で適切に (appropriately)、駆使できる grammaring の指導が求められる (西本 2005)。

### (2) 相手に興味・関心を持ち、相手の発表に対して即興的に考えて聞き返す、問い (inquiry) を立てる

スピーキング指導が「発表」と「やりとり」に分化したが、個別の指導はもちろんのこと、よりインタラクティブなコミュニケーションを目指したい。Show & Tell, Presentation の指導の際に取り入れたい活動である。思考力のみならず判断力や表現力の育成にも資する。

### (3) 実践例 (附属桃山中学校・附属京都小中学校)

- 両中学校とも、非言語情報 (主にパワーポイントで表示された絵や写真) を英語による statement に変換する言語化 (verbalization) の活動に力を入れている。
- 自分の意見を持ちそれを発表するだけでなく、どのような構成や順番で話すことが相手にとって理解してもらいやすいかを考え (ディスコースを意識した思考)、また相手意識を高め、相手の興味・関心・表情なども考慮したインタラクティブなコミュニケーションを目指している。

## 3. 高校

### (1) 英語教育全体の高度化につながる思考力の育成

中等教育の最終段階として高度な英語力のみならず、まさに 世界に開かれ世界と結びついた思考力の育成 が求められる。

### (2) 実践例 (批判的思考力の育成)

佐古 (2018) はグローバル化が引き起こす様々な問題を疑似体験できる「貿易ゲーム」を授業に取り入れている。そのねらいは、協働による課題解決のための技能の伸張と交渉の場面での英語力の強化であるが、これにとどまらない。「非常に複雑な現実世界の経済の動きを単純化・モデル化し、紙やハサミなどのどこにもある簡単な道具を使ったゲームを行うことによって、机上の空論として受動的に教わるのではなく、学習者自らが主体的に、体感し、発見し、考え、議論する参加型学習を実現する。国際問題に関する様々な学習に向けての導入や、これまでの学習事項の再確認としても活用することが可能である」のだ (指導案より)。

佐古孝義氏が目指すところの批判的思考とは何か。

「生徒には自ら〈問い〉を設定する（自分はこれからどのような行動をとるべきかを考える）こと、その〈問い〉に対して自分なりの **Argument** を立てることを実践してもらうことになる。貿易ゲームを通じて、グローバリゼーションが引き起こす諸問題に対して感じた様々な〈感情〉を自分の **Claim** の根幹として、「自由でかつ『公正な』世界はどのように実現可能か」また「自由でかつ『公正な』世界が実現可能だとして、それが持続可能なものとなるためにはどのような条件が必要か」という〈問い〉に対する **Argument** を組み立ててゆく。それは単なる調べ学習のまとめ、ではなく、実感を伴ったクリティカルな議論構築という営みとなるはずである。」

佐古 (2018: 70)

佐古 (2018) の批判的思考の実践は単なるディベートではなく、世界に開かれ世界と結びついた (批判的) 思考力の育成につながる。以下の2点が要諦である (文部科学省「外国語教育強化地域拠点事業」指定 教育実践研究発表会 公開授業資料より)。

- 貿易ゲームという具体的経験を、これまで机上で学んできたこと (知識・情報) に自ら主体的に結びつけ、グローバリゼーションが引き起こしている諸問題を 実感として理解する (原文のまま)。
- 「自由でかつ『公正な』世界はどのように実現可能か」という問いをわれわれの思想的論題として考える。また、それが実現可能だとして、さらに「持続可能なもの」となるためにはどのような条件が必要かという問いを考える。

佐古孝義氏の実践は、「われわれ一人一人が、現在グローバリゼーションが引き起こしている問題のステークホルダーである」という「意味生成」に直結していること、意味構築を志向した貴重な実践であるといえよう。

## VI. おわりに

英語科教育における思考力の育成という問題は、英語による言語的思考 (内的プログラミング) に始まり、世界と結びつき、意味生成に関わる問題でもある。思考力は判断力や表現力と相まって、「意味」という問題を生み出すからである (Kovbasyuk & Blessinger 2013)。

意味 (客観的な意味とは **meaning** であり、個人の意識内に内面化された主観的な意味は **sense** である) を思考とことばの関係の「単位」ととらえたヴィゴツキーの業績『思考と言語』は極めて大きい。単位とは、「要素とは異なり、全体に固有な基本的特質のすべてをそなえ、それ以上はこの統一体の生きた部分として分解できないような、分析の産物」である (ヴィゴツキー 2001: 18)。思考・ことば・意味の関係は弁証法的関係にあり、それぞれ始源が異なっている思考とことばは止揚されて意味を生成するのである (筆者は思考を要素還元論的にとらえたくないが、最も高度な思考はこの弁証法的思考であろう)。この関係は図1の通りである。

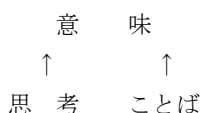


図1 思考・ことば・意味の弁証法的関係

意味生成とは途方もなく大きな問題であり、本稿の守備範囲を超えているが、教育という営みの極めて重要な核であることだけは指摘しておきたい。

## 注

1. ほかに、①教授・学習は発達の普遍的形式であり、発達の最近接領域がその特色であること、②情動という複雑な問題を論じるためにスピノザを現代に甦らせたこと（ただし、ヴィゴツキーの夭逝のために未完に終わっている）、③危機的年齢期を包み込む新形成物発達論はすこぶる現代的であるということ、の三点である。
2. 「全体は部分の総和以上のものである。」（マルクス）  
この意味では、人間の思考レベルを記憶→理解→応用→分析→評価→創造という順に高度になるとしたベンジャミン・ブルームによる思考の分類（Bloom's taxonomy）も要素還元論的で問題がある。思考にレベルの差異は認められ得るが、下位項目（記憶・理解・応用・分析・評価・創造等）を単体として抽出することは不可能であるからだ。下位項目は重なり合ってお互いに影響を及ぼし合っているのが現実<sup>リアリティ</sup>であろう。
3. ヴィゴツキーは晩年に「すべての心理学の中心的问题是自由である。・・・人格発達の壮大な構図：自由への道。マルクス主義心理学のなかにスピノザ主義を蘇生させること。」というメモ書きを残している（西本 2018 原文のまま）。
4. 第二言語習得研究では、インプット（input）→インテイク（intake）→中間言語の発達（interlanguage development）→アウトプット（output）という捉え方が主流であり、アップテイク（uptake）が正しく位置づけられていない。

## 参考・引用文献

- 土井捷三（2016）. 『ヴィゴツキー『思考と言語』入門—ヴィゴツキーとの出会いへの道案内』 大津：三学出版
- 今井むつみ（2010）. 『ことばと思考』 東京：岩波書店
- Kovbasyuk, O. and P. Blessinger. (Eds.) (2013). *Meaning-centered education: International perspectives and explorations in higher education*. New York: Routledge.
- 西本有逸（2002）. 「ヴィゴツキーと第二言語習得(1)：内言とワーキングメモリ」 『ヴィゴツキー学』第3巻 pp.1-8. 神戸：ヴィゴツキー学協会
- 西本有逸（2005）. 「文法テスト」 『これからの英語学力評価のあり方—英語教師支援のために』 田中正道（監修）・野呂忠司 達川壘三 西本有逸（編集） 東京：教育出版
- 西本有逸（2016）. 「英語科教育における人格発達(2)：概念の発達」 『ヴィゴツキー学』別巻第4号 pp.79-86. 神戸：ヴィゴツキー学協会
- 西本有逸（2018）. 「「人格発達の壮大な構図：自由への道」の教育学的考察」 『ヴィゴツキー学』 別巻第5号 pp. 129-133. 神戸：ヴィゴツキー学協会
- 坂野登（1985）. 『意識とはなにか—フロイト＝ユング批判』 東京：青木書店
- 坂野登・天野清（1993）. 『言語心理学』 東京：新読書社
- 佐古孝義（2018）. 「クリティカル・シンカーを育てたい—グローバル化を体感する授業を目指して」 『研究紀要』第91号 pp. 61-78. 京都：京都教育大学附属高等学校
- 柴田義松（2001）. 「ヴィゴツキーの心理学説について」 『新訳版 思考と言語』に所収 東京：新読書社
- ヴィゴツキー, L. S. (2001). 『新訳版 思考と言語』 柴田義松（訳） 東京：新読書社
- ヴィゴツキー, L. S. (2005). 『文化的一歴史的精神発達の理論』 柴田義松（監訳） 東京：学文社
- ヴィゴツキー, L. S. (2012). 『「人格発達」の理論—子どもの具体心理学』 土井捷三・神谷栄司・伊藤美和子・西本有逸・竹岡志朗・堀村志をり（訳） 大津：三学出版

- ウイトゲンシュタイン, L. (1975). 「青色本」 『ウイトゲンシュタイン全集 6 青色本・茶色本他』 大森荘蔵・杖下隆英 (訳) 東京: 大修館書店
- Zavershneva, E. (2014). The problem of consciousness in Vygotsky's cultural-historical psychology. In Yasnitsky, A., van der Veer, R. and M. Ferrari (Eds.), *The Cambridge handbook of cultural-historical psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.